
—科学者の反逆記—

機械王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一科学者の反逆記一

【Nコード】

N7188X

【作者名】

機械王

【あらすじ】

軍事科学者が兵器の世界に己を向かわす。ブリタニアへの反逆を視野に入れて今日も部下と改造・改良を重ねる。一科学者の反逆記一始まります。

なに俺が転生だと？
(前書き)

始まります

なに俺が転生だと？

「おい、どういう事か説明しろ」

「いや、私のミスで貴方を殺しちゃったのよ」

「ふざけるな、まだ造りたいものが有ったのに。ミサイルとかミサイルとかミサイルとか」

「ミサイルばかりなのね」

「地球の科学力じゃそれぐらいしか造れんだろうが」

「そう、でも貴方を殺した事について反省はしているけど後悔はしていないわ」

「何故そこでネタ出した！？」

「神ですから」

「いや精々神（笑）だろう」

「精神壊しましょうか？」

「すいませんでした」

「全く話が進まないわ。一応もう一度始めから話すわね」

「読者が理解していないからな」

「それより読者が居るのか疑問だけどね」

「メタ発言するな」

「はいはい」

「軽く流された!？」

「まあ、長くなっただけでもう一度説明するわ。貴方は私のミスで死んだ。そこまではOK？」

「ああ」

「貴方はまだ生きたいし私はミスを消したい。そこで提案がある」

「何だ？」

「転生してみない？」

「転生って二次小説でよくあるあれか？」

「そうよ」

「出来んのか」

「ええ」

「俺tueeeeeとかは？」

「それは無理よ」

「特典は？」

「3つまで」

「行く世界は？」

「コードギアス」

「俺の原作知識が唯一ある作品だな」

「で、特典はどうする？」

「一つ目は性別は男（男の娘ではない）で容姿はリリなのstすの
ジェイル・スカリエッティの髪を黒くした感じで」

「許可します」

「2つ目は技術チート」

「許可します」

「3つ目は不老不死」

「無理よ」

「じゃあ不死は？」

「許可します」

「以上だ」

「分かったわ、じゃ転生させるわ」

「ああ、じゃあな」

「よい人生をね」

シュン！

「ふう、貴方はどういいう人生を送るのかしらねえ、」

「機柳 鋼」

なに俺が転生だと？（後書き）

設定が次

主人公設定（前書き）

設定

主人公設定

名…機柳 鋼

歳…30

職…科学者

性…男

一人称…俺

神に転生の話を持ち掛けられ、承諾してこの世界へと送られた。容姿はモロに『魔法少女リリカルなのはs t s』のジェイル・スカリエッティ。違うところは髪と目の色が黒なのと髪が短く切っている所である。この世界では朝比奈省吾の幼なじみ（といっても主人公が年上）として誕生。藤堂、仙波、千葉、占部との面識有りで現在は桐原公の所に居る。原作知識があるがあまり使わない。日本人でナイトメアの実用性を示し、桐原公を説得。以後ナイトメアを桐原グループの研究所でナイトメアを改造っている。

能力…技術チート

コードギアスのあらゆる機械のことを知識で知って理解している。現在はその気になればガウエインぐらいは造れるが面倒なので造らない。

不死

死なない、絶対に。老いるけど

主人公設定（後書き）

もう転生するんですか？

俺の人生の日々（前書き）

別段、面白い事は無いですね

俺の人生の日々

「で、神は何がしたいんだ」

や、どうも前回の話の主人公機柳鋼です。前回の話で察してくれると助かるけど俺は転生しました。コードギアスの主人公近辺のオリキャラとして出ると思ってましたがそうじゃ無かったです。

「……鋼！」

「おや省吾しょうごじゃないか」

「その様子じゃ何ともないみたいだな」

「見ての通りさ」

「鋼は何処の所属になったんだ？」

「兵器関係だな。そっちは？」

「藤堂さんの部下だよ」

「ああ、あいつの部下だったっけ。ま頑張れ」

「あいつって……まあいいか」

「で、局面はどうなってる？」

「制空権が取られた」

「ほほう、じゃそろそろ本土決戦だな」

「ああ、そうだね」

「死なないように頑張れよ」

「そっちこそ僕達が死なないような物を造ってくれよ」

「ああ、分かってるって」

「本当か？」

「本当さ」

……今、俺と話している人間の名前は朝比奈^{あさひな} 省吾^{しょうご}。つまり、かの有名な『奇跡の藤堂』の直属だ。まあ、まだ巖島の奇跡は起こってないけど。俺はこの世界に普通の家庭に転生して（成長段階はめんどくさいので書かない）様々な事を学んだ（主に兵器関連だが）。元々技術チートが有ったから今では道具と材料さえ揃えばランスロットぐらいは造れる……はずだ。なんせ一度も試したことが無いからな、ばれたら困るし。

「で、省吾。直で戦場に出たお前なら分かると思うがあのブリタニアのグラスゴーとやらについてどう思っているか聞かせてほしい」

「分かった。率直にいうとアレをただの玩具として扱ってはいけない。これからの奴らの実戦兵器になるだろうな」

「ふむふむ参考になった。有難う」

「でもどうするんだい？こんなことを聞いて」

「くっくく、アレを利用しようかと思ってね」

「成る程、目には目をか」

「そうだ。というわけで省吾、一機盗ってこい」

「また無理難題を」

「これからの日本にはそれが必要だ、頼む」

「……分かったけど、期待はしないでね。僕の上官は藤堂さんなんだから」

「ああ、分かってるよ」

「じゃあまた」

「ああ、またな……そろそろ原作が始まる。その前に京都六家に話をしとかないとな」

あの老人共に借りは作りたくないんだけどなーとか言いながら俺は家に帰った。

俺の人生の日々（後書き）

次回は説得をします。

京都六家（桐原公）の説得（前書き）

説得に入ります。

京都六家（桐原公）の説得

「で、何のようでワシを頼って来た？ 機柳鋼」

今、俺はある男と話しをしている。その名前は桐原。戦後に主人公であるルルーシュ・ゼロが率いる黒の騎士団を支援した男であり主人公がブリタニア人であることを知っている人物の一人。日本最大級の派閥、桐原派のトップであり喰えない狸。今日、俺はこの男に援助を申し出た。曰くあの兵器関連で、だ。

「いやはや、桐原公に私の名前を覚えてもらっているとは光栄。：：まあ、世辞は置いときましよう。今回の私の目的は資金援助です。」

「資金援助じゃと？」

「はい。桐原公、かなり前からブリタニアはナイトメアという戦略兵器を使っておりこちらの軍が次々と撃破されております。先日、戦いで藤堂鏡志郎が厳島で奇跡（という名の戦術的勝利）を日本軍に見せました。然し誰もが奇跡を起こせるわけではありません。そこであちらの兵器をこちらを利用してブリタニアを撃破しようと思いました。が何分資金が無いのでこうして京都六家の一つである桐原家当主の桐原公にお願い申し上げ此処に参上した次第でございます」

「（こやつ、ワシの言おうとした事を全て先読みして言ってきたおる）ふむ、なかなかの意見じゃが今ひとつ足りんのう」

「おや、何が足りないのでしょうか？」

「その事について一つ聞きたいことがある」

「何でしょうか」

「日本は負けるか？」

「はい、少なくとも1～2年の間に」

「聞いている身でなんじゃがその発言は御主にとって不利になると
思わんのか？」

「桐原公がそう思えばそれでも構いません。然し私はそうだとは思
いません」

「ほう、これは高く買われたものじゃ」

「……」

「それで？勝算はあるのか？」

「十中八九。ただこの先、機会があればの話ですがね。ですが私
は一矢報いたいですよ、それこそ藤堂鏡志郎みたいだね」

「……」

「さて、御返答は如何に？桐原公」

「分かった、機密扱いにしておく故にの。制作も我がグループが全
力で支援する、それで良いな？」

「有難うございます、ではこれにて失礼します」

「……ふう、奴ならばやってくれるかのう。ワシが夢見た日本のブリタニアへの反逆を」

「うまくいった、これでナイトメアが造れる。幸い省吾が約束を守ってくれたし」

そう、昨日俺の所属している所にKMF…グラスゴーが届いたのだ。これで全ての条件は揃った。

「さあ、始めるぞ！俺のブリタニアへの反逆を！」

その時に「煩い」と言われたのは後々に語られた笑い話である。

京都六家（桐原公）の説得（後書き）

改造こそ主人公の生き様です。

ビバ大改造！（前書き）

後書きにオマケがあります。

ビバ大改造！

「クックック、これで完成だ」

「出来たのかの？」

「ああ、従来の日本解放戦線や扇グループが使う無頼や無頼改とは路線の違うグラスゴーを改良した新しいナイトメア……その名も『水月』だ」
すいげつ

「水月とは……風流な名じゃのう」

「風流な名前とは裏腹にこの機体は結構凶悪だぞ？なんせスラッシュハーケンをサクラダイトとダイヤモンドの合金を使っているから壊れにくいし貫通しやすい。それに桐原公の情報提供を元に奴らが造っているMVSを日本風に純粋に刀……まあ無銘だが、武器として配備させたしアサルトライフルの弾数も少々増やした。他よりも遙かに使え、もはや専用機並の機体だ」

「で、使える見込みのある奴はおるのかの？」

「まだ、それは分からん。誰も居なければ俺が使うがな」

「ふむ、ではこれに合う者を調べさせるぞ」

「度々感謝する」

………今、桐原公と話しているのは俺が約7年………正確に言えば6年半掛けて造った機体についてだ。この7年でこの日本は大

大きく変わった。7年前、枢木ゲンブが国民の安寧を考え降伏を決意し軍部を抑えるために割腹自殺。それから日本はブリタニアの植民地、エリア11として日本及び日本人の名も誇りも生活も自由も土地も奪われた。イレブンと名づけられブリタニアの下にいる人間となって。そして今も日本を取り戻すために反政府組織が日々戦いつづけている。……これが日本人の公式見解。原作を知る俺は全てを知っている。枢木ゲンブはその子である枢木スザクに殺され目の前にいる桐原公や藤堂鏡志郎によって枢木ゲンブの意志は振曲げられ日本は降伏した。枢木スザクは今、日本を奪ったブリタニアの軍にいる。要は日本を滅ぼした男がブリタニアへの忠誠を日本人で唯一誓っているのだ。当然日本人の間でも『枢木スザク』という言葉を聞いただけで顔を不快にさせる者もいる。俺もまた同様だ。この7年で俺も変わった。一人で研究を続け幾度となく改造ナイトメアを使ってデータを取るためにブリタニア軍に単体での襲撃をかけその度に改良する日々。口調も変え、ブリタニア軍の一部を何度も壊滅させついには『狂える科学者』と日本の反政府組織、ブリタニア軍から畏怖されるようになった。最もブリタニア軍に関してはほんの一部だけだがな。省吾は藤堂鏡志郎についていつて日本解放戦線に居るんで連絡取れないから暇だし……それはそうと、原作が間もなく開始するだろう。第1期アニメの1話、そろそろブリタニア軍が研究しているC・C・《シーツ》が移動する。つまり主人公であるルルーシュと出会うわけだ。それに関して俺は何も思っちゃいない。ただ俺というイレギュラーを含めて原作が始まって欲しいだけだ。リア充死ねなんて決して思っていないさ。

「……おい機柳よ」

「ん？どうした、桐原公」

「物凄く複雑な顔をしておったぞ？」

「そんな顔をしてたか、今度からはそんなことが無いようにしよう」

「ふむ、何も無ければ良いのじゃが」

「大丈夫だ、桐原公。それよりも早く見つけて来てくれ」

「分かっておるよ、ではの」

「ああ……ふう、迷っていても仕方ない。その場で臨機応変にすれば良いだけだ」

ま、どうするかはわかんないけどなー。

所変わってエリア11

（ブリタニア軍内部の研究所）

「申し上げます、極秘扱いの研究素体が奪われました！」

「何？『アレ』が奪われただどっ！？」

「奪ったのは名誉ブリタニア人の数人です」

「さっさと取り返しに行かぬか！」

「イ、イエスマイロード！」

バタバタバタバタ！

「……全く、こんなことが知れたら殿下に顔向けできん。もしあの『狂える科学者』にでも渡ってしまったら大変な事になりかねんぞ」

「クシュン！……誰か俺のことでも言っているのかな。さて引き続きブリタニアに負けることの無いナイトメアについて考えるか」

物語の始まりはゆっくりと近付いていく。

ビバ大改造！（後書き）

機体設定

水月

S U I G E T U

形式番号

T y p e ー 1 ／ 4 A

分類

第6世代KMF相当

所属

キョウト（桐原）

製造

機柳 鋼

生産形態

隊長機（未定）

全高

4 . 2 1 m

全備重量

8 . 2 8 t

推進機関

ランドスピナー

高機走駆動輪

武装

スラッシュハーケン×2

アサルトライフル×1

MVS（刀仕様）×1

乗員人数

1人

搭乗者

（未定）

主人公が6年半掛けて改造及び改良をしまくって造ったナイトメアフレーム。従来のナイトメアよりも近接／中距離戦闘向けの機体で、性能も格段に上がっている。乗り手次第では第7世代と互角に戦う事のできる機体となっている。基本カラーは青に銀のラインが入っている。

河口湖に出る科学者（前書き）

前回出て来た機体を使います。

河口湖に出る科学者

「へえ、クロヴィスは死んだか」

俺は今、桐原公の配下の報告を聞いている。なんせ俺の此処での地位は少しは高いからな。ナイトメアの研究？ ああ、進んでいるさ。取り敢えず『水月（前話参照）』の少弱めの量産機から始めようと思うがな。えっ、他って何？ 俺は何もやってないぞ？ ルルーシユも契約して原作に入っただし、他は無いはずだが……。

「で、クロヴィス殺しの犯人は誰だ？（知っているけど）」

「始めは名誉ブリタニア人の枢木スザクが挙げられて死刑執行しようとしてたんですけど途中で謎の仮面の男“ゼロ”が乱入、自分が犯人だと言い枢木スザクを拉致して逃げました。」

「その時何かあったのか？」

「はい。煙が入っていただけのカプセルを毒ガスだと偽り、取引をしようとしてた。その時に何故かジェレミア・ゴットバルト代理執政官が変に慌てていましたが」

「ふむ、そうか。ああ、もういいぞ」

「では、失礼します」

「……次は河口湖のホテルジャックか。確か首謀者は日本解放戦線の草壁中佐か」

確か、あの事件はお人形の皇女ユーフェミアやアッシュフォードの娘が捕まって

いてゼロがそれを救ってついでに黒の騎士団を正式に創設宣言して、
コーネリア殿下が来て、日本解放戦線の兵器である雷光リニアカノンが出たな。
どうしようか、あの事件を利用して『水月』の実験でもしてみるか
な。そうと決まれば桐原公に進言するか。

「桐原公、私ちょっと『水月』の実験をしたいのですが」

「構わぬが、何処でやる気じゃ？」

「富士の麓の河口湖付近で」

「許可してやろう。じゃが何故河口湖なのじゃ？」

そう聞かれるか。なら、少しごまかすか。

「情報が入ったので」

「なんのじゃ？」

「河口湖にあるホテルに日本解放戦線の過激派である草壁が来ると」

「何が目的で？」

「恐らくはホテルジャックを利用したものかと」

「あれ程、片瀬には止めろと言ったのに……まあよい。で、奴ら
を実験台にするのかの？」

「ええ、構いませんか？」

「構わぬ。アヤツラは既に縁が切れた。好きにするがよい」

「了解。来週末ぐらいに移動します。その時にトレーラーを1台と人員を数人用意して頂けますか？」

「うむ。そのようにする」

「感謝します。では、失礼します」

「ふ、これで行ける。そして帰ってからまた造るか」

事件前日

「ふむ、そろそろか。さっき草壁も見えたし。ホテルには人質となるべき存在も居たし」

「そろそろですか、機柳様」

「ああ、俺が動くのは明日ぐらいだろう。それで、何処まで進んでいる？」

「はっ、『轟雷』の生産状況ですが順調に進んでおります」

「その調子で10機を目処にしてくれ、そのうち機関を設立する」

「分かりました。そう伝えます」

「あ、それと全員に休息を徹底させる明日は寝れないからな」

「了解しました、徹底させておきます」

「……さて、明日が愉しみだ」

翌日

俺は遠くからホテルジャックが起こったのを確認した。そしてブリタニア軍が到着するのを確認した。

「俺は出るが何かあったら報告を頼む。周りに常に警戒しとけよ」

『了解しました』

「さあ、行くぞ！」

「水月、出撃体勢に入りました。カウント始めます。3・2・1・0」

キューーン！

「愉しませてくれよ？ブリタニア軍、日本解放戦線そしてゼロ」

ブリタニア軍側へ

此处ではコーネリアやダールトンらが作戦を起っていた。

「アレックス隊とカリウス隊はこちらの方面から攻めてくれ」

「イエス、ユアハイネス！」

「それから「報告します！」」

「どうした？」

「敵襲です！」

「日本解放戦線が出て来たか、それで何機ほどだ？」

「相手は日本解放戦線では無く正体不明。それに敵は単機です！」

『何だと！？』

「……私が出よう」

「殿下！」

「テロリストは倒すべきだ」

『しかし!』

「構わぬ」

「分かりました。然し、私とダールトン卿がお供します」

「分かった、ギルフォード」

「では……ナイトメアを出せ!」

「ほう、コーネリア直々に出て来てくれるとは……データの採りがいがある。ん? オープンチャンネル……コーネリアか」

「貴様! 何者だ!」

「初めてだな、コーネリア・リ・ブリタニア。我が名は機柳鋼、巷では『狂える科学者』の名前の方が有名かな?」

「（機柳鋼だと!?）その『狂える科学者』が何をしに来た!」

「俺は日本人だ。故にブリタニア軍は此处で潰す（嘘だな。本当はデータを採るためだ）」

「ほう、ならば此処で死んでも文句は言えないぞ?」

「俺が負ける? そんなわけ無いじゃないか」

「本当に勝つ気か？」

「ああ……行くぞ！先手必勝オオオオオオ！」

ガキン！

「くっ、はああああ！」

ヒュン、ヒュン！

「当たらなければどうということは無いのだよ！」

アサルトライフルをコーネリアのグロースターに向けて、発射する。

ダダダダダダ！

「姫様ア！」

「ギルフォードにダールトンか」

『援護します！』

「3対1か、卑怯じゃないが面倒だな」

「回り込め！」

「ハッ！」

「甘いな〜っ」と

ギギギギギギ！と装甲に剣の当たる音がする。

「なあっ！」

「この機体のスペックはグロースターを上回っている。この機体と互角に戦いたいならランスロットでも持って来い！」

「誰が特派の機体などを！」

「そんなものに頼らずともお前なんぞには負けはしない！」

「その慢心がキサマらの負けへと直結する……む？」

秘匿回線での通信が入る。

「機柳様、もうそろそろ時間です！」

「分かった。此処を引いて雷光見て草壁潰してから帰るよ」

「了解しました」

「ふむ……この場から脱出するか。ハアッ！」

「くっ」

「（隙が見えた！）では、さらばだ」

「ま、待てっ！」

「クックック、アハハハハ！」

あーしんどかった。

「反応は!?!」

「すみません殿下、ロストしました」

「いやよい……」

「どうされましたか殿下?」

「ギルフォード……私もまだまだ甘いようだな。心配をかけさせる」

「いえ、お気になさらず」

「ダールトン、体勢を立て直すぞ」

「御意」

「今は目の前の事に集中する。さあ、行くぞ」

『イエス、ユアハイネス!』

ホテルの雷光の傍にて

「撃ち終わったが、かなり凄まじいな」

ひょいと岩影から顔を出す。

「一部の技術は貰ってさっさと草壁潰しますか」

カツカツカツ

「やあ」

「誰だ!？」

「俺か？俺の名は機柳鋼」

「（機柳鋼だと！）よかった！早く我々に協力してください！」

「その前に草壁中佐に会わなければ」

「是非会ってください！中佐は上にいます！」

「分かった。ではな」

パン、パン！

「ぐっ……なぜ」

「お前らはキョウトの断りも無く今回の事を起こした。故にお前らには死んで貰わなくてはならないんだよ」

パン、パン！

「ぐはっ」

「……さて草壁の野郎に会わなくてはな」

ホテル上層へ

「よう、草壁」

「だ、誰だ!？」

ん、周りにはいるのは人質か？

「おやゝ？日本解放戦線の人間が俺の事を知らないと？」

「まさか……機柳鋼か！」

「ご名答だよ？草壁中佐」

「何の用があつて来た？」

「今回の俺はキョウトの命令があつて来たんだよ」

「キョウトの？」

「ああそうだ」

「一体何の御命令が？」

「それはな……」

「それは？」

「……お前の射殺命令さ！」

パンパンパン！

「なっ、ぐふっ」

「きゃああああ！」

「お前はキョウトの命令無くして今回の事を起こした。故に俺に草壁中佐を殺すように言われた」

「私はただ日本を」

「その日本解放が行き過ぎだったのさ」

バタッ

「……死んだか」

「……」

「さてと、帰「お待ちなさい！」……ああ？つてユーフェミア・リ・ブリタニアか」

「貴方はそこにいる人と同じ日本人なのでしょう！？」

「だからどうした？」

「何故殺したんですか！」

「それをてめえらが言うか！ブリタニア人よお！」

「っ！」

「もういい、俺は帰る……けっ、お前も来ていたのか？ゼロ」

「えっ？」

「……」

「だんまりか」

「日本人最大の科学者にして最高峰のナイトメア製作者機柳鋼」

「俺はそうだと自負しているが」

「単刀直入に言おう。お前を仲間に迎えたい」

「断る」

「理由を聞いても？」

「組織の質が低い。せめて前線で指揮を執れる人間とそれなりのナイトメア。結束も必然だ」

「……………」

「もし、上手く行ったら手伝ってやろう。あ、そうそうそのア
ツシュフォード家の嬢さん」

「はい？」

「あの2人（…………）は元気にしているかい？」

「え」

「いや、いいわ。さて帰るか」

「……………今のは何だったの？」

「桐原公、草壁を潰してきたぜ」

「ご苦労だったの」

「……………桐原公。貴方に頼みたいことがある。ナイトメアについて
の事だ」

「む？」

「キョウトでKMFの研究機関を造りたい。勿論他のキョウトの人
間には秘密で」

「なるほどの。分かった、人員はこちらで集めるし希望があれば言うてくれ」

「有り難い」

「代わりに一つ聞きたい事があるんじゃないか」

「ゼロと黒の騎士団か？」

「左様。それで奴らは信用できるかの？」

「わからんが、ネームバリューは今のところ上位に位置している。信用しても良いんじゃないか？まあ俺は協力しに行かんがな」

「ふむ」

「無論、協力命令だけでは信用に欠けるからゼロを呼んで日本解放の真偽を問いてから決めれば良いじゃないか」

「良き答えじゃ」

「ああ、では失礼する」

「……ワシも動くとするかの」

「これでナイトメアが造れる。原作改変に繋がるが……まあいいか。それよりもコーヒーを飲もうか」

河口湖に出る科学者（後書き）

次回はナリタ戦です。今回よりもオリジナルナイトメアが出ます。
ご注意を

ナリタ戦は三つ巴（前書き）

機体設定を載せました。あともう一機は次回の後書きで

ナリタ戦は三つ巴

「壮観な眺めだこと」

俺は今、ナリタ連山に居る。此処は日本解放戦線の本拠地として有名な場所だ。眼下にはナイトメア同士の戦いが繰り広げられている。サザーランドと無頼との戦い。総督や側近等が使うグロースターが日本解放戦線のナイトメアを次々と屠っている。

「情報ではそろそろ黒の騎士団が出るはず……来たか」

黒の騎士団が山間に次々と出現した。その中には黒の騎士団のエースである紅月カレンが搭乗する純日本製のナイトメアである紅蓮式式の姿も見える。パイルバンカーを使うかロマンだな。

「機柳様、異常な熱反応を確認しました」

「報告ご苦労だ、中村」

「光栄です」

「準備出来たか？ 佐藤」

「おう、とつくに出来てるぜ」

「近藤、作戦会議をするから全員呼べ」

「了解」

「ふう……」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、神崎」

「それは良かったです」

「幹部全員揃いました」

「よし、作戦会議を始める。といっても今決める事はない。ただの再確認だ。神崎」

「はい」

「お前はポイント9に行け。そこにはコーネリアとゼロ、黒の騎士団がキョウトに頼んだアレが居る。ゼロは殺さないように出来るだけコーネリアを狙って捕獲しろ。ただし、ナイトメアは破壊するなよ？それと俺らのことは出来るだけ偽れ」

「分かりました」

「近藤、お前は藤堂鏡志朗や四聖剣と組んでブリタニア軍をあらかた蹴散らせ」

「了解しました」

「中村はこの場所で待機し非常時に備えつつこの場所を出来る限り

維持しろ」

「かしこまりました」

「佐藤、寺岡の2人は自分の部隊を引き連れて司令部を狙え」

「^{だぜ}承知」

「これより俺達の戦いを始めるぞ！」

『応！』

今の5人は俺の旧日本軍時代からの部下だ。研究機関を立ち上げるときに俺が呼んだ。それぞれの能力は普通の軍人よりも少し上。ナイトメアの技量も騎士クラスだ。あいつらはそれぞれ40人くらいの部下（内ナイトメア乗りは25人程度）を持っている。奴らが乗る機体は研究機関で開発した『轟雷』、その部下は『烈火』というナイトメアだ。他の機体よりは幾分かスペックは上であるから破壊はされないと思うな。……今回の作戦はブリタニアの軍を叩くことにあるからコーネリアの捕獲はおまけだ。さて俺もでるか……

神崎視点

「聞こえるか、コーネリアよ。既にチェックメイトだ」

「ゼロか！」

今の状況はまずいですね。何てったってコーネリアは油断してるしゼロはゼロでなんか怪しいし。白兜Ⅱランスロットも来ちゃいましたし。ま、そろそろ乱入しますかね

「総督！ 救援に参りました！」

「特派だと……？」

「紅蓮式は白兜を破壊しろ！」

「はい！」

「所がそうもいかないんだよね」

『何！？』

「や、どうも」

「何者で何処の所属か答えろ！」

といわれても偽の所属にしろといわれたから……

「特務機関本部長、機柳鋼直属の部下。神崎と申します」

「「なっ機柳鋼だと！」」

「今回の目的はコーネリア・リ・ブリタニアの確保に有ります。出来れば降伏してくれると助かると本部長も言ってますね」

「そうはさせない！」

「こっちもだ！」

「そうですかあ、ではその紅と白のナイトメアを潰しましょうか。
ハーケン発射！」

ガキン！

『！』

「弾きましたかくそおれ！」

ギギギギギギ！

「くっ」

「紅いナイトメアの方はそこで見ていいですよ」

「ふざけないで！私は戦えるわ」

私の忠告は無視ですか

「……ふざけるなよ？小娘ごときが」

「ひっ！」

ありゃ、つい殺気を飛ばしてしまいましたね。これも若さ故の過ち
ということにしましょう。

「貴方は大人しく見てなさい。それとも死にたいですか？」

「っ！」

「分かったならさっさと「ハアッ！」……貴方はKYですか」

「貴方を此処で捕らえる！」

「無理ですね。確かにこの機体は貴方の機体よりはスペックは下な
んですが、それを覆せる物が有ります。それは技量です。ですよ
ね、コーネリア・リ・ブリタニア？」

「……腹立たしいがその通りだな」

「くっ」

「私は旧日本軍時代から機柳鋼直属の部下でした。故にナイトメア
の技量が高いのですよ？ 貴方に勝てるくらいには」

「だけど、また過去に戻りた「こういうのは何ですが」」

「貴方の人生は貴方が決めます。それは私も同じ事。私は過去には
戻るつもりは有りません。寧ろ未来へ向かうために枢木スザク、貴
方を此処で止めてコーネリアを捕縛します。そしてその先が何なの
かを突き止めます」

「……」

「だんまりですか、なら墜ちなさい（腕に穴でも開ければいいかな
？）」

ガガガガガ!

「ぐあああ」

「さらばです、過去に捕われし男よ」

……なんで、私は枢木スザクを諭してたんだろ? ま、いいや。
さてコーネリアを……あれ?

「姫様!」

「我が騎士ギルフォードか、すまぬな」

「いえ、それよりも此処から脱出しましょう」

……どうしてこうなったし。

中村視点

流石にこれはきついな。

「中村様、ブリタニア軍のナイトメアが10機こちらへ向かっております。おそらくエンドーヴァーあたりの部隊かと」

「そうですか、第1陣は伏兵として山中へ、第2陣と第3陣は防衛ラインへ、予備は後詰めを用意、それ以外は本陣たる此処の防衛にナイトメアを割いてください。それと私の機体の用意を」

「はっ！」

「さてと私も後詰めとして出ますか」

「えっ!？」

えっ………って何？

「何ですか？」

「………いえ、此処で指揮を執ってもらおうと思っていたのですが」

ああ、そういうことか

「問題有りません。此処でもナイトメアの中でも指揮は執れますから」

「了解しました！」

さて、あの時の借りを返させて貰いますよ？

「中村様、エンドーヴァーが一騎打ちを申し出ておりますが」

あいつはそんな熱血漢でしたかね？ まあいいや、

「念のため周りには烈火を配置しといてください。出ますから」

「はっ！」

今度は前の様にはさせないからな。

オープンチャンネルに設定っと……

「久しいですね、エンドーヴァー？」

「その声は中村司か？」

「いかにも。さて、一体何のご用でしょうか？」

「それを解らぬ奴ではあるまい？」

「成る程、確かにその通りですね」

「前の戦いでは旧日本軍の残党としてあのグラスゴーもどきを駆つていたはずなんだが……何だそのナイトメアは？」

懐かしい話をしてくれますね

「これは私の上司が用意してくれた機体ですね（あながち間違えてはないですよ）」

「上司とは一体誰なのか教えてくれないか？」

うーん、どうしようか

「教えたら引いてくれます？」

「……：…良いだろう」

マジですか、あっさりとしていますね

「私の上司の名前は今も昔も変わらず機柳鋼ですよ」

「なんだと！？あの不敗の機柳か！」

おー、ビックリしてますね。しかし、不敗ですか……：…今度言ってみようか。

「なら、俺は退けぬ！此処でお前を倒す！」

「ええっ！？」

何ですか、退いてくださいよ

「覚悟！」

「ええい、どうにでもなれ！行きますよ！」

「望むところ！」

『ハアアアアア！』

なんで、こうなったんでしょうかねえ？

近藤視点

「あれか……奇跡の藤堂と四聖剣の駆る無頼改は」
あれはスペックがこの機体より下だが個人の技量でカバーしているのか

「どっちにしろ足手まといにならなければ良いんだが」

通信を秘匿回線にしてと

「……聞こえるかそこの無頼改のパイロット」

「何者ですか？」

「俺の名前は近藤隆一郎、主の命令により此処に参上した。今回の目的は藤堂鏡志朗、お前らと共闘することだ」

「……何の理由で？」

怪しまれたか、だが

「知らん、主に聞け」

「主とは一体誰だ？」

「機柳鋼」

『!』

驚いているな

「鋼か、なら大丈夫だろう」

「そうですね」

「決まったか？」

まあ、もう決まっているだろう

『我等は貴公と共闘して此処を突破する』

「分かった、精々足掻けよ？」

「ふん、言われなくとも」

「……あ、ギルバート・G・P・ギルフォードが逃げた」

『は?』

「で、代わりに純血派が来てる」

『え?』

「イレブンめ覚悟!」

『ええ!?』

……どうしてこうなったし

佐藤、寺岡視点

「あれか、G1ベースは」

すぐ近くに在ったな

「そのようだな、さっさと叩き潰すぞ」

「そうしようか、お前ら行くぞ！」

『おー！』

「……子供か！」

子供だなーっと

「それは良いけど来たぞ？敵」

「しかし些か遅いな、向こうは」

「こっちのスペックが上だからそう見えても可笑しくないな」

「違うない」

敵は……サザーランド20機に、グロースター1機か

「油断は禁物だ。直ぐにカタを着け……は？」

「いや、可笑しいだろこれは」

「何で、日本解放戦線が黒の騎士団に協力してんだよ？しかも俺らの通り道塞いでるし」

「分からんが……些か邪魔だな。どうしようか、寺岡」

「どうすれば良いんだ？」

「機柳殿の指示を仰ぐか」

「そうしようか」

ハア……どうしてこうなった

「全員、どうしてそうなったし。……まあいい、全機に退避命令でも出しとくか」

秘匿回線で命令を送る

「作戦は失敗したがこれで宣戦布告は出来た。これからが愉しみだ……ククク、アハハハハ！」

夜は更けていく……

その頃、中華連邦国内

「それは確かなのか？」

「*****」

「そうか。で、そちら側は私に何を求めているのだ？」

「*****」

「……分かった。来るべき時には必ず実行しよう」

「*****」

「何？そんな物まで……しかも私用に作ったのか？」

「*****」

「分かった。是非とも期待に答えよう。ではまた」

「*****」

「ふう……来たぞ、日本解放のチャンスが！それまで準備を進めておこう」

ナリタ戦は三つ巴（後書き）

轟雷

G O U R A I

形式番号

T y p e ー 1 ／ 4 B

分類

第6世代KMF相当

所属

キョウトKMF研究機関

製造

機柳 鋼＋キョウトKMF研究機関

生産形態

キョウトKMF研究機関幹部専用機

全高

4・18m

全備重量

8・57t

推進機関
ランドスピンナー

高機走駆動輪

武装

スラッシュハーケン×2

アサルトライフル×1

MVS（刀仕様）×1

乗員人数

1人

搭乗者

キョウトKMF研究機関幹部一同

不敗は戦女神と踊る（前編）（前書き）

2編物です。

不敗は戦女神と踊る（前編）

此処はエリア11中央政庁

……の地下の会議室で。

「……で、ホクリクの様子は怎么样了？」

「は、ホクリクは現在テロリストのホクリク最大である至誠の党に我々の軍が攻撃されている状態。」

「ふむ、それで黒の騎士団は？」

「申し訳ございません、ナリタ戦以降沈黙し続けている様です」

「そうか。……最後に機柳鋼の足取りは？」

「機柳鋼は7年前にNAC……キョウトを訪れて以来行方不明です。そしてその7年後にカワグチ湖で我々と戦闘をしています。その間の7年が未だに分かりませんね」

「ふむ……部下を名乗る者達は？」

「はい。中村、佐藤、近藤、寺岡、神崎の5人はいずれも旧日本軍時代からの機柳鋼直属の部下です。それぞれの技量は不明なのですが、ただ……」

「ただ？」

「エンドーヴァーが『中村の技量は自分よりも上』と言っていました。」

「何か知っているのか？」

「彼の話に寄ると、『このエリアにある“同じ釜の飯を食った仲間”というべきかな』と言ってましてね」

「まあ、詳しく詮索はするな……以上か？」

「はい」

「これより私はホクリクを叩く。その間、ユフィの側に着いてくれ
ダールトン」

「畏まりました、殿下」

「うむ……では行くぞ！ギルフオード」

「御意」

キョウトKMF研究機関にて

「オーイ、そっちは出来たか？」

「ああ、それよりデータは？」

「ここにあるぜ」

「これで、出来るな！」

『ああ！』

ワイワイガヤガヤ

「……元気だねえ」

「良いんじゃないですか？」

「そうそう」

「そうかねえ」

「そうですとも！」

「ハア、全く俺がふがないばかりにこんな事に成るとは」

「それも運命かもしれませんよ」

「運命ね……。そういえばあのシステム完成した？」

「あのシステムですか？ええ、一応完成しましたが」

「次の機体にはそれを使おうと思ってな」

「そうですか、では一刻も早く完璧にします！」

「分かった」

「それにしても、流石『狂える科学者』マッドサイエンティストですね。あんなシステム……フロートシステムとハドロン砲でしたっけ？」

「ああ、そうだ（この時期にロイドも創っていたからな、日本版で良いかもな）」

内心で付け足す

「流石です。やっぱり『科学の英雄』と呼ばれることは有りますね」

「……はい？」

今、何と言った？コイツ

「『科学の英雄』？」

「あつ、知らないんですか？全世界の科学者の間で噂になってますよ？」

「マジか？」

「真面目です」

ええーどうして俺が英雄？

「何故に？」

「日本で初めてナイトメアを理解したのと、“アレ”が原因ですね

」

「“アレ”と言うとハドロククラスターか。だが、あれはまだ研究段階なんだが？」

ハドロククラスターとはぶっちゃけハドロク砲を拡散させただけ

「試作品を作成した時点で凄いですから」

「そんなもんかね」

「そんなもんですよ」

そんなもんなんだ……。

「そういえば、ホクリクに総督様が出るそうですよ？」

「ほー」

ん？良いことを聞いたぞ

「機柳様、顔が怖いです」

「ん？そうか」

「何か、ヤバいこと考えてませんか？」

神崎、お前はエスパーか！

「イヤ？カンガエテイナイサ」

「何で片言なんですか……」

「良いじゃないか別に」

「そういうなら……」

物分かりのいい奴は嫌いじゃないぞ？

「それはそうと、おいお前ら！」

『はい？』

「『極』は、いつ頃完成する？」

『あーっと、早ければ明日迄には』

「だったら、直ぐに完成させてくれナイか？」

『サー、イエッサー！（（。11））ガタガタ』

「うむ」

「どっか出かけるんですか？」

「野暮用に、な」

戦女神よ、決着を付けさせて貰うぞ？

ホクリクゝ

「このまま押せ！テロリスト共は既に壊滅しているぞ！」

『おー！』

「チッ、上は何してるんだよ！」

こっちは壊滅状態なんだぞ！？

「逃げるか徹底抗戦、それとも援護要請の話中」

「相手がグロースターなんてこっちの無頼じゃ勝てねえよ！」

「だが、どうしろってんだ？」

「……」

「……なあ、俺らは此処で死ぬのかよ？」

「……その必要は無い」

「え？」

なんだこのナイトメアは？味方の新型か？

「お前らは逃げて戦力を補給しろ。此処は俺が引き受ける」

引き受ける……だと？ まで、コイツは誰なんだ？

「お前は……誰だ？」

「俺の名？ 俺の名は……機柳鋼だ」

へ……、えええええええ！？

「どうした、まだ終わらないのか！？」

「そっそれが、テロリスト共の中から新手の敵ナイトメアが……」

「何？」

どういふことだ、敵に新型は居ないのでは無いのか？

「間違いでは無いのか？」

「……そういえば何故かテロリスト共も混乱しておりました。」

「ふむ……」

「報告します！」

「なんだ？」

「敵の新型はナイトメア部隊を退け、本陣に迫っております！ お逃

げください！」

馬鹿な、逃げろと言うか！

「…………いや、私は出よう」

『何ですと！？』

たかが一機であるからな

「所詮、テロリストの仲間で単機。最後の足掻きだろう」

「了解しました！ナイトメアを用意させます！」

「うむ」

「報告します！敵の新型のパイロットが分かりました！」

ほう、早いな

「誰だ？」

「パイロットの名前は機柳鋼です！」

『何だと！？』

「…………ふ」

楽しみだな

「クックック、久しぶりだなあコーネリア・リ・ブリタニア!」

カワグチ湖以来だね

「その声……やはり機柳鋼か」

「ふん、今此処で至誠の党に死んでもらうと厄介なのでな。足止めさせてもらうぞ?」

この後の計画の為にな

「だが、山中に潜ませている兵を使えば「甘い」……なんだと」

「俺が一人だと思ったか? 悪いが俺の部下にてめえらのナイトメア隊に襲撃をするように言ったからな」

中村達は置いてきましたよ?

「その部下とは「因みに」」

「中村達じゃあ無いぞ? 俺が今日率いているのは一般戦闘員のみだ(ま、全員がナイトメアを持っているがな。烈火ですけど)。お仲間は来ないんだろ? さあ殺り合おうじゃないか!」

「望むところだ!」

「さあ、エナジの貯蔵は充分か? セイツ!」

錬鉄ネタですけど何か？

「何とも無いわ！ハアッ！」

「ならば……これでどうだ！ヴァリス！」

ZUGA A A N！

「何故貴様がそれを使っている！？それよりも貴様の武装は何故、特派のランスロットと同じなんだ！」

「へえ、そーなのかー（棒）（だって同じ様に造っているし）」

「貴様は！此処で！捕まれ！」

「だが断る！」

「問答無用！」

「オウ、ナンテコッタイ」

GYU I I I！

「これでも一撃が与えられないとはな………」

「隙有り！」

GYA G I G I G I！

「くっ」

キン！キン！キンツ！

「防いだか」

「私を軽く見てもらっては困る」

「ではもう少し、踊ろうか」

不敗は戦女神と踊る（前編）（後書き）

水月・極

S U I G E T U ・ K I W A M I

形式番号

T y p e ー 1 ／ 7 A

分類

第7世代KMF相当

所属

キョウトKMF研究機関

製造

キョウトKMF研究機関

生産形態

主人公専用機

全高

4・07m

全備重量

8・23t

推進機関
ランドスピンナー

高機走駆動輪

武装

スラッシュハーケン×2

アサルトライフル×1

MVS（刀仕様）×1
ヴァリス

可変弾薬反発衝撃砲×1

乗員人数

1人

搭乗者

機柳 鋼

『水月』を基とした機体。性能と出力が上がっており、ランスロットと互角以上に戦える。MVSを一つ外してヴァリスを付けることで軽量化も出来た。カラーは水月と同じ色になっている。

不敗は戦女神と踊る（後編）（前書き）

祝..お気に入りが50件を超えました! 皆さん、本当に有難うございます!
これから『科学者の反逆記』をヨロシクお願いします!

不敗は戦女神と踊る（後編）

「おおおおお！」

ギギギギギ！

「チツ、まだまだあ！」

ZUGYAAAAAN！

「そこだ！これで……」

「ふっ、掛かったな？」

「何っ！？」

「お足がお留守ですよ！」

MVSで足払いを掛ける。

「くっ卑怯な！」

「卑怯汚いは敗者の戯れ言お！」

そのままMVSを振りかぶり、一閃。

「こんな攻撃など……っ、エナジーが！」

「そこだあ！」

ヴァリスに切り替えて攻撃。

「ぐあああああ！」

「追撃、追撃イ！」

「そんなもので私が怯むと思ったか！」

「思ったらんわ！そおおい！」

ヴァリスを放り投げる。勿論、コーネリアのグロースターに向かつて。

「何!?!」

「チェエストオ！」

MVSに再び切り替えて突きの体勢。

「これでえ！終わりじゃああ！」

「終わってなどおらぬわ！」

ギチギチギチ！

「エナジーが尽きている筈なのに何故貴様は諦めない!?! さっさとやられれば良いものを！」

ギギギギ！

「私には総督としてブリタニアの皇族としての義務がある！」

ジジジジジ！

「義務！？そんなこと俺には関係の無い事お、その動きを無理矢理にでも止めるぞ！」

足を狙って攻撃したいのだが、後から自害されても原作的に困る。
此処は腕を狙うべきかなあ？

「これで「殿下！」……何っ!？」

茂みから出て来たのは騎士ギルフォード。

「何故此処へ来た！」

「殿下！私は貴方の騎士です。死なすわけにはいきません！」

「ギルフォード、お前という奴は……」

何だこの茶番は？正直言ってつまらないんだが

「だが此処で退くわけには行かない！此処で機柳鋼を仕留める！ギルフォード、できるか？」

「イエス・ユア・ハインス！」

何？この状況正直勘弁してほしい

「2対1か……ハッキリ言えば面倒だ」

そりゃスペックは圧倒してるけど数でこられちゃねえ。原作でゼロ
Ⅱルルーシュがランスロットを評価したように、所詮は個。ほぼ同
じスペックの複数には勝てない。だが……

「（退く分には問題ない！）行くぞ、貴様ら！」

「こい！」

俺が退く為に必要な手段は敵を怯ませてその隙に逃げることに。エナ
ジーも少々心許ない。チャンスは1度だけ、最速でやる。狙うはコ
ーネリア！

「おおおおお！」

MVSを

「何？」

コーネリアのグロースターに向かって

「せいやあああああ！」

投げる！

「なっ！」

「殿下あ！」

この隙に俺は

「ははっ、またあおう！」

逃げる！

「くっ、まて！」

「待たんよお！」

そのままキョウトに向けて走り去った。

「待たしても逃がしたか！」

「申し訳ございません」

「いや、構わん」

「ん……通信？殿下」

「どうした？」

「エンドーヴァーの部隊がホクリクを制圧しました」

「そうか、良くやった」

「これでこの辺りの勢力は沈「ビー！ビー！」殿下！緊急連絡です。
……これは！」

「どうした？ギルフォード」

「キュウシュウブロックで反乱！フクオカ基地が制圧されました！」

「なんだと……」

「さらにダールトン將軍から至急戻るようにと通信が来ました！殿下！」

「分かっている！行くぞギルフォード！」

「イエス・ユア・ハインス！」

「あー疲れた」

「どこ行っていたのですか！」

「ちょっと北陸へ」

「そうですか」

「機柳様！九州で反乱が！」

「そうかそうか……これで計画が完成した（ボソツ）」

「え？機柳様？」

「全員準備しろ！これから九州へ向かう！」

「はっ！？」

「漸く俺の計画が成功する……クツクツ。アハ、アハハハ！」

不敗は戦女神と踊る（後編）（後書き）

烈火

REKKA

形式番号

TYPE-1/4C

分類

第5世代KMF相当

所属

キョウトKMF研究機関

製造

機柳 鋼+キョウトKMF研究機関

生産形態

キョウトKMF研究機関一般戦闘員

全高

4.16m

全備重量

8.40t

推進機関
ランドスピンナー

高機走駆動輪

武装

スラッシュハーケン×2

アサルトライフル×2

乗員人数

1人

搭乗者

キョウトKMF研究機関一般戦闘員

主人公と新たにキョウトの裏側で創設されたキョウトKMF研究機関（代表は主人公）が製作した純日本製KMF。他の組織の基本的な一般戦闘員KMFであるグラスゴーや無頼やサザーランドや日本解放戦線で使用されている無頼改よりもスペックが高い。ただ、武装が乏しい。基本カラーは赤に黒のライン。

フクオカ基地―前哨戦（前書き）

原作ではモブなあの人が出ます。

フクオカ基地―前哨戦

フクオカ基地側へ

「敵、航空艦より爆撃機が発進したようですが、速度が戦闘機以上です！」

「なに！？」

この反乱の首謀者である澤崎敦は驚愕している。

「空輸では無いのか？」

ツアオ・ユエンミン
曹淵明も驚きを隠せていない。

「翼はともかくあの機体は見たことがある………そうか、あれが」

「あの奇想兵器――ランスロット蘭須洛特か！」

「ふっ」

……だが、澤崎は薄く笑っていた。

「以上が現在のフクオカ基地の様子です！」

「盗聴の報告ご苦労……さて、そろそろ「機柳様」………ん？」

「そろそろ教えて頂きたいのですが」

「何？」

「貴方の計画です」

「……」

「残念ながらキョウトの桐原公を通じてこちらで調べさせて貰いました。貴方のパソコンのデータも勿論拝見させて戴きました。」

「……それで？」

「何故黙っていたのですか？」

「俺は今回の事が終わり次第話すつもりだった」

「何故今回の事が終わり次第なのですか？」

「今回の事で俺は手に入れた人材が居る」

「……まさか」

「そう、俺が引き入れたい人材とは……旧日本の官房長官だった男。澤崎敦だ」

『なっ!?!』

「澤崎敦だと……?」

「あの臆病者を何故？」

「日本の面汚しを我々の陣営に入れる？」

「どうして……」

「ん？不服か？」

『当然（だ（です））！』

「何故に？」

「何故って……何であんな臆病者を入れるんだよ！？」

「それにあの男は中華連邦に亡命したでは在りませんか！？」

「日本を捨てたんですよ！？」

「……全てが二流、故に不服」

「それにあの男が役に立つんですか？」

普段の様子からは想像も出来ないほどの激怒ぶりだ。駄菓子菓子

「お前らは甘く見すぎだ。澤崎の事をな」

『え？』

「奴は【力】を隠している。といっても俺が隠すように画策したのだがな」

「どういう事です？」

「中華連邦に亡命させたのも俺の指示、今回の計画の立案者は俺と澤崎。更には奴に新たな【力】を与えたのも俺だ」

「【力】？」

「……まさか」

「……ナイトメア？」

「そうだ。俺の自信作というべき機体、そして【力】とはその特徴にある」

「その特徴とは何ですか？」

お、落ち着いてきたか

「特徴は大火力、これ一つ。だが一斉掃射であのブリタニアが創つた戦艦^{ヴァアロン}を落とせる程だ」

『……（それって封印するべき機体じゃね？）』

皆、驚いているようだ。だが、これ以上現実逃避してると作戦に支障をきたすから、そろそろ現実に戻すか

「おーい、元に戻れ！」

『……ハッ！私（俺）達は何を』

「いんや、特に何も」

『そうですか』

そうですそうです

「さてと作戦内容ですが、至って単純です。貴方達はブリタニアと中華連邦軍を抑えて下さい。ただし、イレギュラーには充分注意してください」

「機柳様は？」

「俺は澤崎の所へ行く。俺の考案したコアとフロートユニットが動くかどうかの試運転も兼ねてな……」

「イレギュラーって例えば何ですか？」

「中華連邦軍の増援か、ブリタニアの総督が出るか、ゼロが来るかの3つぐらいかな？」

「はい、とりあえず気をつけて作戦を実行します」

「我、機柳が部下。故に不動」

「ああ、そうだぜ！」

「分かりました」

「よし………ミッションスタート作戦開始だ」

またフクオカ基地側へ

勝利目前かと思われていたのがゼロとガウエインの出現により変わった。

「第三戦車隊、壊滅！」

「敵の航空艦と戦闘状態にあった攻撃機連隊も戦線崩壊の様！」

「敵、新型奇想兵器二体、最終防衛線を突破しつつ、こちらに急接近しています！」

「そうか」

理性と自制心を失いかけた通信士官の報告にも澤崎は余裕の表情で答えた。

「澤崎、どうするのかね？」

曹^{ツァオ}も心配そうに聞いてくる。

「簡単な事、こちらも応戦すれば良い」

「そんなものなぞ有るわけが……」

秘匿通信を起動する。

「同志諸君、アレの整備は終わったか？」

「はい、何時でも出撃出来ます！」

「なら、100秒後に出撃する。準備をしてくれ」

「はっ！」

「いったい何を！？」

「私が出撃する」

「馬鹿な！○○ごときでは手も足もで」「私が何時○○で出撃すると
言った？」「何？」

「まあ此处で吉報を待て」

カツカツカツカツ

「出来たか」

「はっ！何時でも行けます！」

「分かった……澤崎敦、出撃する！」

それは機柳鋼がかつて創ったナイトメアフレーム。高機動・大火力
を誇るこの機体の名を……“^{ビャク}白”という。

「もうすぐでフクオカ基地だ！」

「そのようだな……ん？ あれは何だ？」

「ナイトメア……ゼロ、君の仲間か？」

「この機体と同じ様に飛んでいる機体を見るのはそのランスロット以外には無い」

「では誰が……オープンチャンネル？」

「そのようだな」

「初めましてだな、ゼロ。そしてまた会ったな枢木の息子」

「[!]」

「私は新日本政府暫定主席の澤崎敦だ」

「馬鹿な……貴様がナイトメアに乗れるとは聞いていないぞ」

「それにその機体は……？」

「これは私の【力】だ」

「【力】だと……？」

「ああ、だがゼロ。君の言っている『武力を持たない民間人を犠牲にするような』【力】では無いぞ？」

「貴方は何故そこまで……！」

「これは私の目的が有るからなのだが……まあいい。戦いながらでも話そうじゃないかっ！」

「ゼロ、此処は」

「組まないといけないようだな」

「ああ、先に奴を潰すぞ！」

「ふん、分かっている」

「さあ、こい！」

フクオカ基地一前哨戦（後書き）

白

BYAKU

形式番号

Type-1/6A

分類

第7世代KMF相当

所属

〔日本〕

製造

機柳鋼

生産形態

澤崎敦専用機

全高

4.51m

全備重量

8.91t

推進機関
フロートユニット

飛翔滑走翼

武装

スラッシュハーケン×2

アサルトライフル×2

小型ロケットランチャー×2

ショートタイプ
MVS×4

ハドロン砲×2

乗員人数

1人

搭乗者

澤崎 敦

中華連邦に戦時中亡命し、戦後にフクオカ基地を中華連邦の力で襲撃し暫定的に新日本の元首となった澤崎敦専用の機体。このKMFの存在自体が中華連邦軍内でも内密にされており、知っている人間は主人公と澤崎敦本人と同じく亡命した日本人数名のみ。主人公がナリタ戦後に「その気があるなら……」と澤崎敦に渡した対軍様式KMF。枢木スザクの乗るランスロットとゼロの駆るガウエインがフクオカ基地司令部を襲撃しようとする時に澤崎敦が出した切り札であるこの機体は火力が馬鹿に出来ないくらいヤバイ。しかも接近戦も出来るから楽々倒せない。カラーは白銀に黒。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7188x/>

－科学者の反逆記－

2011年11月16日23時27分発行